

Title	<Book Reviews>J.D. Legge. Intellectuals and Nationalism in Indonesia : A Study of the Following Recruited by Sutan Sjahrir in Occupation Jakarta. Monograph Series. Ithaca, New York: Cornell Modern Indonesia Project, 1988, ix + 159p.
Author(s)	土屋, 健治
Citation	東南アジア研究 (1988), 26(3): 338-340
Issue Date	1988-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/56340">http://hdl.handle.net/2433/56340</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

あるが、これはある動作を導く語で、普通はこの語の後に本動詞が置かれ、動作に微妙なニュアンスの違いを与えるものである。本辞書では、この語は「動詞的間投詞」(Werkwoordelijk Tussenwerpsel)として分類され、また「前置的」と解説されている。

(例) Kakara ogé *gék* geus *sor disuguhkeun*. 「腰を下ろすやいなや、もう、もてなされた。」

上の文で、動詞導入詞 *gék* は本動詞の *diuk* (座る) が省略されているが、「さっと座る」という意味を含んで使われている。もう1つの動詞導入詞 *sor* は「何か差し出される」意味を表す本動詞(ここでは *disuguhkeun*) を導き、「すぐさま…」の感じを与えている。

このように本動詞の省略がしばしば行われるため、既存の辞書が本動詞を示しているように、それぞれの動詞導入詞がどの動詞とペアで使われるのかを明示しておくべきであると考えるが、本辞書には本動詞が示されておらず、不親切である。

本辞書は、語の用法についてわかりにくいという欠点を持ってはいるが、ケルンの集めた語彙と、LBSSの辞書を除く8冊の辞書の一語一語について検討を行なった上で語義を丁寧に解説しており、現代スダ語辞書としては最良のものと言えよう。

(森山幹弘・Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, Leiden.)

J. D. Legge. *Intellectuals and Nationalism in Indonesia: A Study of the Following recruited by Sutan Sjahrir in Occupation Jakarta*. Monograph Series. Ithaca, New York: Cornell Modern Indonesia Project, 1988. ix+159 p.

I

スタン・シャフリル(1911~66)と彼が率いたインドネシア社会党(PSI: Partai Sosialis Indonesia)は、インドネシア政治史にユニークな位置をしめている。第1は、政党の基盤と党勢からみれば、その成立(1948年)から解党(1960年)に至るまで、弱小政党の一つであったにもかかわらず、多数の閣僚を出すなど「身の丈に余る」役割

を果たしたことである。第2は、PSIに参加したのがもっぱら高学歴の知識人であったので、この政党は政治集団である以上に、ある思想的モードを有するグループとして、国の内外に影響力をもったことである。党としての活動を停止してすでに28年も経つにもかかわらず、シャフリルなしにPSI(系)という言葉は、今なお話題にされることが多い。

著者レグは、このユニークな知識人の集団について、どういう評価を下すことが適当なのかという点を本書の課題としている。その背後には、現代史研究者の間でシャフリルとPSIについての評価が大きく分かれているという事情がある。とくに顕著なのは、ケーヒンとアンダーソンの評価の違いで、前者が独立直後のシャフリルの役割を重視するとともにその政治思想を高く評価した<sup>1)</sup>のに対し、後者はそれをほとんど意味のないものとし代わりに政敵タン・マラカと彼にしたがう「青年グループ」(ブムダ)を重視した。<sup>2)</sup>これに対して著者は、アンダーソンによって振られすぎた振り子を戻す、すなわちシャフリルらの意義を再評価する(9ページ)必要から本書を編んだと述べている。なお、著者はオーストラリア・モナシュ大学歴史学教授でインドネシア史専攻、著書にスカルノに関する平明な伝記<sup>3)</sup>や、インドネシア地域研究の入門書<sup>4)</sup>がある。

II

本書の目次は次の通りである。第1章序論、第2章インドネシアにおけるナショナリズムと知識人の役割、第3章占領下のジャカルタにおけるシャ

- 1) Kahin, George McT. *Nationalism and Revolution in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press, 1952.
- 2) Anderson, B. R. O'G. *Java in a Time of Revolution: Occupation and Resistance, 1944-6*. Ithaca: Cornell University Press, 1972.
- 3) Legge, J. D. *Sukarno: A Political Biography*. Sydney: Allen & Unwin, 1985.
- 4) Legge, J. D. *Indonesia*. Sydney: Prentice-Hall of Australia, 1977.

フリルサークルの形成，第4章新しいメンバーの横顔，第5章原則と可能性・シャフリルの政策，第6章結語。巻末に第3章と第4章に関連するメンバー45名の一覧が掲げられている。

以下に各章ごとに概要をみていこう。第1章では，先に述べたケーヒンとアンダーソンの評価の違いを示して，本書の執筆意図を明らかにする。この意図，つまり，シャフリルとそのグループ（シャフリル派）の役割を再評価するために，1948年のPSIに参加したメンバーをシャフリル派の中核メンバーとして，彼らの足跡をさかのぼる。その結果，独立以前の1931年12月に結成されたインドネシア民族教育協会（Club Pendidikan Nasional Indonesia, PNI-baru つまり「新PNI」と略称される）以来のメンバーと，日本軍政下のジャカルタで新たに参加したメンバーの二つのグループの存在が指摘される。以下の各章において，シャフリル自身の経歴とこの二つのグループの内容が明らかにされることになる。

第2章は，新PNIの成立と植民地政庁による弾圧等，独立以前のナショナリズムの状況をシャフリルの足跡を中心に述べる。新PNIはきわめて高い教育を受けた知的エリートのクラブであり，シャフリルはハッタとともにその中心的役割を果たしたのち，政庁の弾圧を受けて西イリアンとバンダネイラに流刑される。ここでは，併せて，インドネシアの知識人がどのように形成され，彼らがナショナリズムとどう関わったかについて，ていねいな整理が行われる。しかし，新しい資料や論点が提示されているわけではない。

第3章と第4章は，1942年から1945年にかけての日本軍政下のジャカルタで，流刑地から戻ったシャフリルの許へ出入りして，政治や社会の状況について自由に討論した人々及び1945年8月の独立直後にそこへ加わった人々が，PSIの中核を占めたことに注目して，彼らについてのプロフィールを描いている。ここが本書の中心である。著者は45名のメンバーを特定しているが，そのなかには，Andi Zainal Abidin, Takdir Alisjahbana, Chairil Anwar, Rosihan Anwar, Ali Budiardjo, Kemal Idris, Aboe Bakar Loebis, Mangunkusumo 兄弟 (Darmawan 及び Suyitno), Imam Slamet Santoso, Soebadio

Sastrosatomo, T. B. Simatupang, Murdianto, Maria Ulfah Soebadio, Dr. Sudarsono, Soedjatmoko, Daan Yahya ら，現在活躍中の者も含めて錚々たる知識人が含まれている。これらの人々について，インタビューその他で知りえた限りの情報（経歴，シャフリルとの関係から読書や趣味に至るまで）が丹念に記載されている。また，これとは別に，新PNI以来のメンバーで，軍政期以来シャフリルと提携しつつも，それとは別の人的ネットワークを作り上げた人物として，Djohan Sjahroezah に注目し，シャフリルと並ぶ重要人物として，その足跡を辿っている。ジョハン・シャフルザは，これまで研究者の間でもほとんど無名であっただけに，この部分は貴重である。

この時期に形成されたシャフリル派グループの特徴として著者は，(1)出身種族は多様であるがいずれも上層階層に属する，(2)植民地下で高度の教育を受け，とくに，スラバヤ (HBS) 及びジョクジャカルタ (AMS) のエリート高等学校の同窓生が多い，つまり，知的エリートのネットワークと重なっている，(3)それゆえ，オランダ語がもっとも近い言語であり，インドネシア語は成人後に学んで身に着けた言語である，(4)生活様式全般で西欧化され，サッカーやテニスを好み，外国語で広く小説を読み，広範囲にわたる社会科学関係の書物に目を通して，(5)それゆえ，植民地支配に抵抗し民族独立を希求する一方で，オランダを“respectful” (p. 81) とみなし，オランダへの留学は“巡礼” (p. 83) であった（ただし，それは独立後次第に幻想と化していく），(6)このような文化的にオランダ指向であることが，(西欧的)デモクラシーを信奉し，日本を反デモクラシーとして反日の立場に立たせる動機となる，点を挙げている。

第5章では独立後の政治過程におけるシャフリル派の動きが追跡される。ここでの著者の評価はケーヒンのシャフリル評価に近く，シャフリルが独立直後において，複数政党制を主張する一方大統領権限の制限をはかったことは，古い世代と対日協力者に反対する青年の希望を代弁するものであったこと，外交路線を推進した背景には，独立を達成するための醒めた現実認識があったことを指摘している。このシャフリルの現実主義は新

PNI以来の政治家としてのシャフリルの資質であったが、それが独立後の政治過程で存分に発揮された点も指摘される。これとともに、PSI結成に至る経緯——アミル・シャリフディンの率いたインドネシア社会党 (Parsi と略称) とシャフリルの率いた社会主義人民党 (Paras と略称) の合体 (1945年12月) から、Paras 系の脱退と PSI の結成 (48年2月) に至る政治過程——が整理される。そしてシャフリル派の現実主義 (反ラディカリズム) と大衆からの遊離性が、アミル派のポピュリズム、ラディカリズムとの対比において浮彫りにされる。

第5章は、新 PNI 以来のシャフリルグループの知的モードの一貫性が指摘されるとともに、PSI 自身が1950年代半ばには政党としての力を失い、そのメンバーの多くが、スジャトモコにおいて典型的にみられるように、“professional intellectual” (p. 131) として内外に知られるとともに、それぞれが“private life” (p. 132) に戻っていくありさまが記述される。

### III

本書はシャフリルグループの再評価を通して、インドネシア・ナショナリズムにおける西欧的知識人集団の成立と展開、その挫折の過程を描いている。著者はそのために、従来シャフリルだけに集中していた研究領域を、彼の個人的ネットワークへと広げ、その範囲で丹念に資料をつみ重ねて提示している。そこから知識人のさまざまな歩みがかがえる点で、本書は貴重な情報を提供している。インドネシア現代史の研究者だけでなく、植民地における知識人の役割に関心をもつ者にとって、一読されるべき研究書である。

しかし、他方で、インドネシアの知識人の問題を本書のようにシャフリルグループに限って解明するにせよ、なお追究されるべきことがらが残されているだろう。評者がもっとも関心をもつのは、

著者が新しい知見として提示したジョハングループの内容である。シャフリルとジョハンの二つのグループは重なり合いながらも別箇のネットワークを形成していたと指摘されているが、このジョハングループについて解明されるとすれば、PSI のもう一つの側面が明らかになると思われる。ジョハン自身が労組活動の指導者として、のちに全インドネシア労働者中央機構 (SOBSI) となる組合の結成に参加したとされており、ここでは、大衆的基盤に根ざす活動が認められるからである。PSI のこのような広がりの中に、例えば、タマン・シスワの PSI 系の指導者<sup>5)</sup>も位置づけられるのではないだろうか。本書はその点で、シャフリル周辺のインナーグループ及びジャカルタのメンバーに視野を限定しすぎているきらいがある。第2は、終章でも少し触れていることであるが、PSI 的な政治思想 (西欧的な個人の自立とデモクラシー、リベラリズムの追究) が、その後のことにスハルト体制下でもつ意義や役割についての解明である。シャフリルとそのグループは、〈知が力である〉ことへの全幅の信頼をもっていたといえよう。それが、普遍主義への確信 (知性によって普遍的真理に到達しようという確信) として、インドネシアの政治史・政治思想史上に、うねりのように現れたり消えたりしてきたといえよう。そのことを、学生、ジャーナリスト、作家、テクノクラート、教師等について具体的にみていくことは、当面著者の視野の外にあるとはいえ、たんに、現在のシャフリルと PSI の意義についてのみならず、インドネシアの知識人のあり方を考える上でも、きわめて重要な課題であろう。

(土屋健治・東南ア研)

5) 土屋健治「タマン・シスワとインドネシア現代政治——『9月30日事件』への対応をめぐって」『東南アジア研究』25巻3号、1987年。